三重県における粥占い神事

水谷令子・久保さつき・西村亜希子
(鈴鹿短期大学)

The Year's Fortune-tellings with the rice in Mie Prefecture

Reiko Mizutani, Satsuki Kubo and Akiko Nishimura
Suzuka Junior College, 1250 Shono-cho, Suzuka-shi, Mie, 513

〒513 三重県鈴鹿市庄野町1250

The year's fortune-tellings with rice in Mie prefecture are investigated and the relation between them and rice cultivation is researched in this paper.

1. The range of the year's fortune-tellings with rice extends from Yokkaichi to Matsusaka and this region doubles a rice-producing district in the Ise Plains.
2. The objects of this divination are almost early-, middle-, and late-ripening varieties of rice plants. In a few cases, wheat, adzuki beans and vegetables are also added to them.
3. The divination has been taken shape as folklore festivals on Ko-Shogatsu, the new year's day according to the agricultural calendar, and afterwards, it also has become a Shinto rite such as praying for a fruitful year.
4. In some areas, they divine with adzuki beans and rice gruel. We suggest that this has a relation to the custom of eating adzuki beans and rice gruel, and 'zenzai', sweet adzuki soup with pieces of rice cake, and to pray health and happiness in the new year on Ko-Shogatsu.

三重県における粥占いを調査し、稲作農業との関連について考察した。

1. 粥占いは、四日市から松阪までに分布しており、この領域は、伊勢平野の稲作地帯とほぼ一致している。
2. 占いの対象は、ほとんどが、稲作の早稲、中稲、晩稲である。一部では、麦、小豆、野菜類が加わっている。
3. 粥占いはおそらく、小正月に民俗行事として行われていたものが、後になって、五穀豊穰を願う神事としても行われるようになったと考えられる。
4. ある地域では、小豆粥を用いて占いが行われている。小正月に小豆粥やぜんざいを食べて無病息災を願う風習があることとの関連が考えられる。

1. はじめに

天候や農作物のでき具合を含めた1年の吉凶を占う年占いは古くから行われていたといわれる。三重県においては、桑名郡の多度大社（5月4・5日）、猪名部神社（4月4・5日）の馬を使った「上げ馬神事」や志摩や南紀地方には年の始めに弓引きによって占いをする神事も残っている。

米や小豆を使った年占いは、日本各地にみられる。日本のまつり・年中行事事典¹⁾によれば、諏訪大社（長野県下諏訪町）、金鑽神社（埼玉県児玉郡神川村）、三峰神社（埼玉県秩父郡大滝村）、貫前神社（群馬県富岡市）、大物忌神社（山形県飽海郡）、佐太神社（島根県八束郡鹿島町）などで竹筒を用いた占いが実施されている。大物忌神社が1月5日、佐太神社が2月15日以外は1月15日に実施されている。諏訪大社の筒粥神事では、42種類の作物の出来を占い、判定結果を大声で参詣者に知らせるといふ。これらは農耕、特に稲作農業と関連が深いといわれ、現在でも三重県内においては鈴鹿市と松阪市によく保存されている。

日本の神社で行われる神事のほとんどは稲作との関連が深く、予祝儀礼、播種儀礼、田植儀礼、成熟儀礼、収穫儀礼と相次いで行われてきた。粥占いは、御嶽神事と同時に行われた予祝儀礼であったと考えられているが、筆者らの調査では、米作りの所作をまねる儀礼である御嶽神事と粥占いを同時に実施している例は見られず、御嶽神事は粥占いより時期の遅い春の例祭にとり込まれたと思われる。伊奈富神社では4月16日に、小許曾神社では3月7日に、所作を伴うことはないものの春例祭の別名として御嶽神事の名称が残っている。

粥占いの意義は、天候によって大きく左右される稲作作業に先立って、天気予報などない時代に、占いによ

って作柄や天候（雨量）を予測し、作付け計画の参考にするものであるが、現在は実質的な効用はないものの、神事の一部、あるいは地域の民俗行事として伝承されている。

粥占いの方法は3種類ある²⁾。1つは凹型といわれるもので竹の管筒を粥の中に入れて、粥が煮えた後に筒を取り出し、筒に詰まっている粥の分量や性状の比較によってその年の穀物の作柄などを占うものである。この型は社寺で行われる場合が多いが、民間で行われた例もある。三重県に残っている粥占いはすべて凹型であった。2番目は凸型である。凸型の粥占いは、ヌルデ（白膠木：うるし）の枝を使い、その半分の皮を削って白い木肌を出して作った粥掻き棒を粥の中に入れ、その棒に付着した粥の量によって作柄を占うというもので、山梨県では極めて盛んに行われていた。粥掻き棒の形式は多様であるが、その祖型は木肌を白く削りだした箸であったといわれる。多量の米粒が付着した粥掻き棒は豊かな稲穂の象徴でもあると言われている²⁾。3番目は粥の湿乾および粥の扱いなどに関するものである。粥が固いと田が割れる兆しがあるので凶、やわらかいと吉とするものである。また、炊きあがった粥を器に入れて床の間に置き、翌朝固まり具合を見て、その年の運を占うものである。これらは水田の湿潤を求めることで「水（雨量）の予祝」となっている。本稿は三重県に保存されている粥占いを調査して、代表的なものについて紹介し、稲作行事との関連を考察すると共に、三重県外の例とも比較した。

2. 調査方法と時期

1993年に三重県神社庁を通じて、三重県下の全神社815社の宮司を対象に「食にまつわる神事」の実施状況をアンケート調査した。

しかし、アンケートの回収率（29.6％）は悪く、また

表1 三重県における粥占いの状況

神社名	地 域	実施日時	神事の名称	占う対象	炊きあがり
岸田神社	鈴鹿市岸田町	1月2日10時	粥占	稲作	白飯
小許曾神社	四日市市小古曾町	1月14日18時	粥試し神事	稲作・小豆	小豆粥
阿射加神社	松阪市小阿坂町	1月14日18時	粥試・火試	稲作・雨量	小豆粥
敏太神社	松阪市美濃田町	2月5日10時	粥試	稲作	白粥
菅原神社	鈴鹿市国分寺	2月14日12時	粥占・火試	稲作・野菜・雨量	白粥
伊奈富神社	鈴鹿市稲生町	2月14日20時	世例祭	稲作・雨量	白飯
酒井神社	鈴鹿市郡山町	2月14日13時	よだめし祭	稲作・麦作・畑作	小豆粥
椿大神社	鈴鹿市山本町	2月21日6時	粥占神事	稲作・穀類・野菜	小豆飯
*	河芸町北黒田	2月13日夕刻	粥占い	稲作	白粥

* 前日より竹筒を3本入れて炊いた粥を仏壇に供えた後、大般若經の転読祈禱が行われる。祈禱後に入れてあった竹筒を開けて稲作の吉凶を占う。

記載内容も不十分なものが多かったので、これだけで実態を把握することは困難であった。

次に1993年から1995年にかけて新聞記事などからの情報収集、電話による聞き取りなどで粥占いの実施地域を特定した。

実地調査は1995年2月と1996年1～2月に行った。本文の記述は大部分観察と聞き取りによるものであるが、過去の状況などについては一部分、文献を参考にした。三重県下の粥占いの状況について表1に示した。

3. 結果および考察

(1) 伊奈富神社の「世例祭」の検討

鈴鹿市稲生町の伊奈富神社の「世例祭」は民俗誌などにも紹介されている神事で、2月14日の夜行われる³⁾。

写真1 粥は暗闇の中で炊く（伊奈富神社）

当日夕刻より宮総代と宮当番が社務所に集まり、午後8時になると移動式の竈を拝殿と本殿の間の通路に置き、照明のない、暗闇の中で粥（炊きあがった状態はやわらかなご飯）を炊く（写真1）。一般には公開されておらず、特に本殿に近いとい

写真2 宮司が竹筒をあける（伊奈富神社）

参加は禁止されている。洗米と占用の竹筒3本を白い土鍋に入れ、薪を使って粥を炊く。この竹筒は筋目の印をつけた長さ約10cm、内径2cmの二つ割の竹筒を麻糸で結わえたもので毎年同じものを使っている。粥が炊きあがると宮司はじめ宮総代たちは拝殿に移り、粥の入った土鍋を神前に供えて神事を行う。神事後、宮司は麻糸を解いて筒を開け、中の粥の入り具合を見てそのままかわらけに並べる（写真2）。翌朝竹筒は三宝にのせられて拝殿前に示され、氏子はこれを見て結果を自ら判断する。竹筒に入っている米粒が多ければ豊作、少なければ不作とする。炊いたご飯が固いとその年は雨が少なく干ばつを受ける印とされる。ご飯は小分けして拝殿前に置かれ、翌朝占いの結果を見に来た参詣者はそれを持ち帰り、その年の無病息災を願って食べるのである。

昭和初期には、占う作物が雑穀（その内容は麦・キビ・アワ）、大豆、稲の3種類であったようだが⁴⁾、現在は稲のみとなり早稲・中稲・晩稲の3種について占っている。

(2) 菅原神社の「粥占・火試」の検討

写真3 境内で粥を炊く様子（菅原神社）

鈴鹿市国府の菅原神社では、2月14日、「粥占・火試」が行われる。正午すぎ神社の広場に大やぐらを3つ組み、8升鍋3つで粥を炊く（写真3）。粥を炊くのは宮当番の役目である。その中の1つに、占いの竹筒12本を紐で編んで入れておく。同時に火の中には雨量占いを目的とする「火試」用のカシの小枝12本を銅線で編んだものを瓦にのせて入れておく。小枝の燃え具合で、2月から翌年1月までの雨量を占うのである。「粥占」用の竹筒は二つ割にしてあり、長さ12cm、内径1.5cm、カシの小枝は長さ15cm、太さ1.2cmである。約1時間で粥は炊きあがり、竹筒を取り出し、宮総代が紐をほどいて竹筒の中の粥の入り具合で大吉・吉・小吉などと判定し、それを宮司が記録する（写真4）。しかし、宮司による神事は

写真4 「粥占」の結果を宮司が記録し公表する（菅原神社）

粥を煮ている間に行われ、神事が終了した後、占い行事は宮総代たちによって実施され、宮司は単なる記録係であった。現在では占う作物は12本の竹筒の先頭（編み始め）から順に早期（稲）、早植（稲）、早稲、中稲、晚稲、白菜、茄子、キャベツ、甘藷、西瓜、大根、玉葱とされる。栽培する稲の品種が多様になるに従って占う対象が次第に変化してきた様子が推察される。

氏子は、各自で持ってきた椀に粥を入れてその場で食べたり、鍋や弁当箱に入れて持ち帰り、家族と共に食べて無病息災を願うという。

占いの結果は氏子の間に回覧して作付け計画の参考に使われていたというが、現在は回覧はされても参考にすることはほとんどないだろうということであった。

(3) 阿射加神社の「粥試・火試」の検討

松阪市小阿坂町の阿射加神社の「粥試・火試」は、1月14日午後6時から行われる。この神事は三重県の指定民俗行事になっており、例年新聞紙上にその様子が紹介される由緒ある民俗行事である^{5) 6)}。

神事は特別に作られた室内（調査）の炉の回りで、大

写真5 「粥試」「火試」が実施される炉（阿射加神社）

勢の見物者の見守る中で実施され、「粥試」と同時に雨量を占う「火試」も行われる（写真5）。

「火試」は、1月から12月までを墨書してあるカシの棒を炉の中で燃やし、途中で、やはり1月から12月までが書かれている杉板の上にカシの棒の焼けた部分（オキ）を置き、杉板の燃え具合によってそれぞれの月の雨量を占う（写真6）。「火試」用のカシの棒は縦横各4cm、長さ60cmの角材である。

写真6 「火試」の様子（阿射加神社）

阿射加神社で炊く粥は小豆粥で、伝承に従って米5合、小豆2合を用いる。三重県において、小豆を加えるのは9例中4例であるが、全国的にみると小豆を加える場合の方が多い。小豆の粥は、赤い色を食べて冬の陰気を陽徳で消せるという意味、あるいはこれを食べれば疫病にかからないという中国の俗信からきたものといわれる⁷⁾が、野本²⁾は小豆を稲作にとって不可欠な日の恵みを予祝する食物と意味づけている。鍋を炉の中の五徳にかけ、粥を炊く途中で占い用の竹筒3本を入れる。竹筒はあらかじめ二つ割にしてあり、長さ20cm、内径2cmのものを麻糸で結わえて用いる。炊きあがると竹筒を開けて中に入った米粒と小豆粒の量で早稲・中稲・晚稲の作柄を占い、記録する。占いが終わると、オォーと「トキの声」を3回上げ、皆で万歳をして神事は終了となる。小豆粥は参詣者に配られる。この神事と同時進行の形で「かんこ踊り」と「どんど焼き」も社殿の外で行われる。

(4) 小許曾神社の「粥試し神事」の検討

四日市市小古曾町の小許曾神社では、小正月の1月15日を中心に一連の正月行事が行われ、「粥試し神事」はその一つである。

小許曾神社は、明治40（1907）年合祀されるまでは、東の宮（神明社）と西の宮（小許曾神社）があり、かつては、両宮で同様の神事が実施されていたものが、統合さ

れた現在では小許曾神社中心の神事となったという³⁾⁸⁾。

「粥試し神事」は、1月14日の午後6時から実施される。当日午後から、占いに使う竹筒を藁で編んだり粥を食べる竹箸の準備などをする(写真7)。宮当番は14日午後から神社境内の清掃、一連の神事の準備なども行う。拝殿の右手前に建てられた籠もり堂には真ん中に炉が作っており、そこに鍋をつるして小豆粥を炊く。8升鍋に、米5合、小豆1合、水4升という記録通りに準備して、

写真7 「粥試し神事」に使う竹筒の準備(小許曾神社)

宮当番と宮総代が約1時間かけて粥を炊く。その際、5本の細竹を藁ですだれ状に編み、それを炊きはじめるから鍋に入れ粥を炊く。この占い用の竹筒の内径は藁ニゴ3本通る程度(約0.5cm)と細く、長さは3寸5分(約10cm)である。粥が炊きあがると、粥の中に入れた竹筒を取り出し、大きなかわらけに入れ、三宝にのせて神前に供え、「粥試し神事」を拝殿で行う。

神事が終了すると、長老の宮総代がナイフで竹筒を2つに割り、占いは中に入った米粒を数え、米粒の数をそのまま占いの結果として宮総代が記録する(写真8)。占う対象は、早期・早生・中生・晩生の各稲と小豆の5

写真8 長老の宮総代が竹筒を割る(小許曾神社)

種で、結果は、拝殿前と社務所に貼り出して公表する。

「早期」の占いは1965年(昭和40年)から加えられたもので、作付け品種の変化に対応して占う対象が増えたと考えられるが、現在においてこの周辺の稲作では早期と早生以外の品種を栽培することもなく、この占いの実効性も失われていることとて、ここでの粥占いの変貌は興味深い。

「粥試し神事」は、かつては旧暦1月15日の午前0時から行われたが、明治時代になり太陽暦に変更されたのを期に1か月遅い2月15日に行うようになった。そして太平洋戦争後、再び1月に戻し、深夜に実施されていたのを、時間を早めて1月14日の夕刻から始めるようになった。「粥試し神事」が終了すると小豆粥は参詣者に配られ、青竹の1本箸を使って食べる(写真9)。これを食べると1年間無病息災といわれ、かなり多くの氏子が集まる。

写真9 参詣者は青竹の一本箸で振るまわれる小豆粥を食べる(小許曾神社)

翌1月15日、早朝7時から「奉賛(ぶさん)神事」が行われる。太平洋戦争前までは、氏子全員が参加してジネギ(地祢宜)と宮当番の家で行われていたが、現在は、地域の代表者9人だけが参加して、小許曾神社の社務所を会場にして実施される。この神事は、氏子の結束を固めるために行われる会食で、三重県伊賀地方にも「宗旨(しゅうし)祭り」あるいは「そうし」といっている類似の行事が存在し、氏神の例祭をこのようにいうこともある³⁾。小許曾神社の係には、氏子総代と宮当番がある。氏子総代は選挙により5人選ぶが、宮当番は1年ごとに15人ずつ代わっている。それは戸主が努めることになっており、家の並びに従い順番が決まっている。13年か14年に一度の周期で回ってくるといわれ、地祢宜と呼ばれる代表者が合議の上で決められる。これは民間から出る

一年神主である。「当(頭・禰とも書く)屋制」の一形式であろう。神社に関する奉仕は宮当番が行う。太平洋戦争前までは、ミヤタ(宮田)と呼ばれる神社所有の土地があり、これを耕作するのは重要な任務であった。神社の薪集め、神社へ供えてあった鏡餅を細かく切って各戸へ配る仕事、幟立て、提灯屋台飾りなどが主な仕事であるが、小許曾神社の祭事は年間21回にも及び、宮当番は一年中大変な奉仕活動を強いられる⁸⁾。

奉賛行事は進行係である地祇宜が定められた献立を口上で紹介しながら進められる。最初に地祇宜は扇を前に置いて一礼し「あけましておめでとうございます」と挨拶する。「まず御神酒を出させていただきます」と口上すると、つづいて給仕係が各人の土器に神酒をついでまわる。次に「それでは御膳を出させていただきます」という口上につづいて給仕係は順番にひとりずつ角膳を配る。膳には手前左に一の汁の椀(中には何も入っていない)、手前右に飯椀、右手奥に二の汁の椀(汁の実であるささがきごぼう、ゆでた白魚、角切りの焼き豆腐が入れてある)、左手奥になますの小皿(大根と人参で作ったなますを縦二列に細長く盛り、その上にたつくりがのせてある)、中央に酒用の茶碗、手前に箸と柳で作った楊子がのせてある。以下口上につづいて一の汁(大根の1cmの角切りを入れた赤味噌汁)、御飯(給仕係は給仕盆に飯椀をうけとり飯櫃の御飯をよそう)、お酒(茶碗を盆にとり湯桶から注ぐ)、御飯、二の汁(給仕係が椀に熱い澄まし汁を注ぐ)、お酒、御飯、漬物(2人分が小皿に盛られて配られる)、お茶(湯呑み茶碗に入れて各人に配る)、焼き物(小皿に半紙を敷き、その上に生の塩鰯をのせて配る)の順に給仕される。「これで終了させていただきます」の言葉を地祇宜がいうと奉賛の行事は終了する。この会食形式は酒(御神酒は別)の前に御飯を供するという古い日本の食事様式が残っていると考えられる。

「奉賛神事」の後、「当渡し神事」が神社の拝殿で行われる。これは宮当番の新旧交代の儀式である。

4. おわりに

前報⁹⁾も含めて三重県における粥占いをまとめると、

- 1) 粥占いは、三重県内では四日市市小古曾町から松阪市小阿坂町までの鈴鹿川流域以南の地域に分布していた。これは伊勢平野の米作地帯の中心地である(図1)。
- 2) 占う対象は、稲作の早稲・中稲・晩稲の3種類が多く、稲作での作付品種の変化に応じて占いの対象も変化した例もある。三重県の例では最も多かったのは菅

図1 三重県における粥占いの分布

原神社の12種であった。文献¹⁾によれば占う対象は36種、42種あるいは53種の例²⁾もあることから、三重県に残っている粥占いの対象はかなり少ない。

- 3) 粥占いは、おおむね神社で催されるものが多いが、神事とは切り離して実施される例(菅原神社・岸田神社¹¹⁾・河芸町の仏式)もあることから、小正月の民俗行事としてムラや各家で行われていたものが、後に神事の中に取り込まれた可能性が高いと判断される。
- 4) 1月15日中心の行事が太陽暦への移行に伴って、2月15日に実施される場合もでてきたものと考えられるが、その他の実施日もみられたので、今後検討したい。
- 5) 粥占いの原型は1月14日の深夜の行事ではなかったかと考えられるが、夕刻に実施される例が多くなった。古くは日没から一日がはじまるとされていたからである¹³⁾。
- 6) いくつかの地域では、小豆を加えた粥で占いが行われている。小正月には小豆粥やぜんざいを食べて無病息災を願う風習が残っていることとの関連が考えられる。

- 7) 農業の方法や作付け作物も変化し、占いの実効性はなくなっているものの、地域によっては多くの氏子参加の民俗行事として伝承に務めているものもある。

参 考 文 献

- 1) 倉林正次編：日本のまつり・年中行事事典，桜楓社，東京，p. 118, p. 290 (1983)
- 2) 野本寛一：稲作民俗文化論，雄山閣，東京，pp. 491-492 (1993)
- 3) 三重県神職会編：三重県下の特殊神事 (1938)
- 4) 「日本の食生活全集 三重」編集委員会編：聞き書き三重の食事，農山漁村文化協会，東京，pp. 85-86 (1987)
- 5) 伊勢志摩編集室編：三重の祭，p. 28 (1994)
- 6) 松浦良代：祭りごよみ松阪，三重県郷土資料刊行会，pp. 14-16 (1983)
- 7) 清水桂一編：たべもの語源辞典，東京堂出版，東京，p. 5 (1983)
- 8) 四日市市史誌編纂室編：四日市市史 第五巻 資料編民俗，四日市市，pp. 526-532 (1995)
- 9) 久保さつき・西村亜希子・水谷令子：三重県における「粥占い」神事，鈴鹿短期大学紀要，第16巻，pp. 65-70 (1996)
- 10) 大塚民俗学会編：日本民俗辞典，弘文堂，東京，p. 171 (1972)
- 11) 鈴鹿市教育委員会編：鈴鹿市史 第三巻，鈴鹿市，pp. 653-654 (1989)
- 12) 田中義広編：日本の祭り事典，淡交社，京都，p. 43 (1991)
- 13) 須藤功：葬式—あの世への民俗，青弓社，東京，p. 112 (1996)